O1-008

新型コロナウイルス感染症の流行に伴う経済状況の悪化と親子の健康状態の関連

羽入田 彩花[1]、花見 彩七[2]、佐々木 渓円[2]、杉浦 至郎[2]、山崎 嘉久[2]、林 典子[3]、鈴木 美枝子[4]、秋山 有佳[5]、多田 由紀[6]、祓川 摩有[7]、船山 ひろみ[8]、衞藤 久美[9]

[1] 実践女子大学公衆衛生学研究室　[2] 実践女子大学生活科学部
[3] あいち小児保健医療総合センター
[4] 十文字学園女子大学人間生活学部
[5] 玉川大学教育学部　[6] 山梨大学大学院総合研究部医学域
[7] 東京農業大学応用生物科学部　[8] 聖徳大学教育学部
[9] 鶴見大学歯学部　[10] 女子栄養大学栄養学部

【目的】
新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行に伴う経済状況の悪化と親子の健康状態の関連を調査し、健康危機管理における支援のあり方を検討した。

【方法】
日本全国に在住するインターネット調査会社の登録パネルのうち、2 歳から 6 歳の幼児の保護者 2000 人を対象とした横断調査を、2021 年 2 月に実施した。本研究では無効回答者を除く 1825 人(父 750 人、母 1075 人）を解析対象者とした。COVID-19 の流行前と比較した家族の経済的なゆとりの変化を 5 段階リッカート尺度法で質問し、ゆとりが「かなり減った」あるいは「やや減った」ことを「経済状況の悪化」と定義した。親子の現在の健康状態は、先行研究をもとに設定した多肢選択式質問（多重回答）で把握した。経済状況の悪化と健康状態の関連は、父母の回答別に$\chi 2$検定で評価した。さらに、検定結果が P<0.1 であった健康状態を従属変数、経済状況の変化を独立変数、対象者の基本特性や現在の経済状況を調整変数としたロジスティック回帰分析を行った。

【結果】
経済状況の悪化と関連を示したもしくは関連する傾向がみられた因子は、母の回答における児の［入眠困難］（調整オッズ比［95%信頼区間］＝1.87［1.07-3.27］）、［易刺激性］（1.55［0.99-2.43］）、また父の回答における、［易刺激性］（1.76［1.06-2.91］）や［癇癪］（2.04［1.26-3.31］）、［入眠困難］（2.02［1.00-4.10］）であった。経済状況の悪化と関連する保護者の健康状態は、［易刺激性］（母1.85［1.36-2.51］;父 2.42［1.56-3.76］）、［起床困難］（1.82［1.15-2.89］;2.05［1.06-3.95］）、［児への叱責］（1.78［1.28-2.49］;3.21［1.82-5.68］）、［家族間の衝突］（1.92［1.19-3.11］:3.95［2.01-7.76］）、［抑うつ］（1.77［1.23-2.56］;2.33［1.39-3.92］）、［便秘傾向］（2.32［1.09-4.93］;4.62［1.65-12.9］）、［体重減少］（母のみ 3.59［1.49-8.64］）、［入眠困難］（父のみ 2.92［1.60-5.34］）であった。

【結論】
COVID-19 の流行に伴う経済状況の悪化は、親子の精神的健康状態や睡眠習慣と関連していた。パンデミック対策では、各家庭の経済状況にも留意した親子の健康支援が必要である。

この調査は、厚生労働行政推進調査事業費補助金成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業「幼児期の健やかな発育のための栄養･食生活支援に向けた効果的な展開のための研究」(20DA2002) として行った。

O1-009

Covid-19 流行前後の 5 歳児健康診査の結果の比較

寺川 えり子[1]、稲持 英樹[2]、有年 貴子[1]、小林 穂高[3]、石﨑 優子[4]

[1] 名張市 福祉子ども部　子ども発達支援センター
[2] なばりこどもクリニック
[3] 名張市立病院 小児科
[4] 関西医科大学小児科学教室

【はじめに】
子どもの体力や運動能力は、体力の高かった昭和 60 年頃と比べると低い水準にある（スポーツ庁，2018）。そこへ 2020 年から Covid-19 が流行することで、体を動かすことが減り（田部ら、2021）子どもの発達に影響を及ぼしていると言われている。
三重県名張市では訪問型 5 歳児健康診査を 2012 年から実施している。Covid-19 流行前の要経過観察児が 20%代前半であったが、2020 年以降増加し 2022 年は 34%であった。
そこで、Covid-19 流行前後の 5 歳児健康診査の結果を比較することを目的とし、今後の事後フォローの充実を図るための示唆を得たい。

【方法】
三重県名張市が実施している 5 歳児健康診査の一部の個別観察 21 項目を、Covid-19 流行前の 2014 ～ 2016 年の受診者 2045 人、2017 ～ 2019 年の受診者 1931 人、流行後 2020 ～ 2022 年の受診者 1740 人の通過、不通過数についてχ^2検定にて検証を行う。

【結果】
Covid-19 後と 2017-2019 年の比較では、前腕の回内外（左）、お箸は何をするものか、閉眼 20 秒と自己刺激が p<0.001 以下、クラスの名前、帽子は何をするものか p<0.01 以下、先生の名前、指のタッピング（左）、前腕の回内外（右）、片足ケンケン（左）、靴は何をするものか、本は何をするものか p<0.05 以下で有意差がみられた。
2014-2016 年では、氏名、クラスの名前、先生の名前、指のタッピング（右、左）、帽子は何をするものか、靴は何をするものか、お箸は何をするものか p<0.001 以下、しりとりをする p<0.01 以下、両前腕回外肘屈曲、片足ケンケン（左）、本は何をするものか、閉眼 p<0.05 以下となった。

【考察】
Covid-19 の流行により発達の成長が著しい時期に体を使う機会が減ったこともあり、全体的に発達が緩やかになっていると考えられる。前腕の回内外、会話や概念に有意差が見られ、うまく遊べない子やコミュニケーションがうまく取れない子が増えている可能性がある。
幼児期に遊びを中心とする身体活動を十分に行うことは、生涯にわたって健康を維持したり、何事にも積極的に取り組む意欲を育んだりするなど、豊かな人生を送るための基盤づくりとなり（文部科学省，2012）全体の発達促進に役立つ（中川，2013）。
幼児が自発的に体を動かして遊ぶ機会を十分保障することが重要であり（文部科学省, 2012）コロナ禍で遊びの工夫が必要となる（中谷,2022）。事後フォローとして実施しているあそびの教室（出前教室）等の継続は重要である。

【今後の課題】
Covid-19 流行中に言葉の獲得をする年齢だった子どもが今後 5 歳児健康診査を受けるため追って検証していく必要がある。

Presented by Medical*Online